



Title	否定命令文の変遷について：素性照合の観点から (その1)
Author(s)	加藤, 正治
Citation	大阪外大英米研究. 1999, 23, p. 141-149
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99224">https://hdl.handle.net/11094/99224</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 否定命令文の変遷について —素性照合の観点から (1) —

加 藤 正 治

## 1. はじめに

英語の否定文は中尾・兜馬 (1990) によると、概略次のような変遷をしてきたとされている。

- (1) (a) ic ne secge.      O E
- (b) I ne seye not.      E M E ~ 15 c
- (c) I say not.      14 c 末 ~ E M o d E
- (d) I not say.      15 c ~ E M o d E
- (e) I do not say.      16 c ~ 17 c 末確立
- (f) I don't say.      17 c ~

本稿ではまずこの否定文の変遷のメカニズムを、最近の生成文法において提唱されている素性照合の考え方を用いて記述する。用いる生成文法の枠組みは基本的にChomsky(1995)の第四章で述べられている枠組みである。この考え方の中で、本稿で扱うテーマの性質上もっとも重要なのは「移動は素性照合によって駆動される」という点である。次にその記述をもとにして英語の否定命令文がどのように変遷してきたかを記述する。

以下において文構造を表わす場合には、機能範疇Agrを用いない考え方を採り、否定文にはNegPが存在すると仮定する。また、従来VPとされてきたものは軽動詞(light verb) vを主要部にもち、その補部にVPをとる二重構造を形成していると考える。

- (2) [cp    C    [tp    T    [vp    v    [vp    V    ]]]]

## 2. 否定文の変遷のメカニズム

古英語期にみられる(1)(a)のタイプは否定接語 $ne$ を動詞の直前に用いて否定文を形成している点が特徴的である。

(3) Men ne cunnon secgan to soðe. (*Beowulf* 50-51)

また、次例にみられるように倒置構文では否定接語 $ne$ は移動する動詞に随伴する。

(4) Ne mæg ic þæs oðsacan. (*Boethius* 97,6) [小野・中尾 (1980)]

したがって、 $ne$ は定形動詞に付加して一つのユニット（この場合はV）を構成すると考えられる。このことは、 $nat$ ( $\leftarrow ne + wat$ ),  $nolde$ ( $\leftarrow ne + wolde$ )のような縮約形が存在することからも容易に理解できる。この「 $ne +$ 定形動詞」のユニットは、従来の考え方従えば、 $ne$ をNeg位置に配置し、そこへ動詞を繰り上げることによって形成されることになる。しかし、Neg位置への動詞繰り上げは主要部付加であり、さらに付加は一般に左側付加であるという仮定のもとでは、「 $ne +$ 定形動詞」ではなく「定形動詞+ $ne$ 」が形成されることになる<sup>1</sup>。そこで本稿では、「 $ne +$ 定形動詞」は辞書部門で形成された単一の語彙項目（この場合はV）であると考え、そのまま列挙(enumeration)に配属されると仮定する。さらに次の二点を仮定する。①Negがもつと考えられる[+Neg]は一貫して強い素性である②繩田（1998）に従って、定形動詞を誘引する(attract)強い素性[+F]が存在し、[+F]の生じる位置は歴史的にC→T→Vのようにシフトすると考える。古英語期にはまだ動詞第二位現象(verb second phenomenon)が存在したとすると、[+F]はC位置にあることになる。以上の点を考慮に入れると(3)の派生は概略次のようにになる（ただし、主語の移動は省略してある）。

(5) [cp C [+F] [tp T [NegP Neg [+Neg] [vp men v [vp [ne cunnon]



secgan to soðe]]]]]

否定接語を伴う（複合？）動詞 $ne cunnon$ はVを経由して、強い素性[+Neg]を

照合するためにNegに付加され、次に強い素性[+F]を照合するためにCに付加される。主語menは（恐らく）EPP素性を照合するためにTP指定辞の位置に移動しさらに動詞第二位現象を示すためにCP指定辞の位置に移動すると考えられる。

文否定の次の段階は(1)(b)の形式で初期中英語期から15世紀にかけて用いられた。二つの否定要素neとnotを用いている点が特徴的である。

(6) I ne think not it shall be so. (*Le morte Arthur* 76)

neの扱いは(1)(a)と同様であると考える。他方、notについては、neによって示される否定の意味をいわば補強するようなかたちで付け加えられたという点を考慮に入れると、純粹の副詞として動詞句に付加しているとみなすのが良いと思われる。従来のようにNegPの指定辞の位置に存在すると考えることも可能であるが、Negのような機能範疇の最大投射の指定辞位置は素性照合のために用いられるのが通例であるので、この考え方は採用できない。この時期の英語では動詞第二位現象は見られないと考えられるので、前段階でC位置に存在していた強い素性[+F]はTにシフトすることになる。(6)の構造の派生は概略次のようにになる。

(7) [cp C [tp T [+F] [NegP Neg [+Neg] [tp not [tp I v [vp [ne think]]]]]]]



it shall be so]]]]]]

先の場合と同じく、動詞ne thinkはvを経由して強い素性[+Neg]を照合するためにNegに付加し、続いて強い素性[+F]を照合するためにTに付加する。Cには[+F]がないので、（ほかの強い素性がない限りは）動詞の移動はT位置で止まる。主語は（恐らく）EPP素性を照合するためにTP指定辞位置へ移動する。

否定接語neは十分な強勢を置かれず消失する傾向にあったので、次の段階ではnotだけが残留した(1)(c)の形式になる。この形式は後期中英語期から初期近代英語期にかけて見られる。

(8) They wanst not what folke they were

(Caxton: *Sonnes of Aymon*, iv, 120) [OED]

(*not*がNegPの位置に存在するのか、それともvPに付加された位置に存在するのかに關わらず) この場合は定形動詞が否定辭*not*の左側に位置するので、定形動詞はTがもつ強い素性[+F]によって誘引されT位置に移動していると考えられる。すなわち、前の段階と同じく[+F]はT位置にとどまっており、まだv位置へはシフトしていないと考えられる。否定辭*not*は、①上述のように相変わらず純粹の（否定）副詞のままでvPに付加され動詞句を否定しているとも考えられるし、また②この段階ではすでに副詞から（否定を表わす）機能範疇に変化しており、Negのもつ強い素性[+Neg]を照合するために挿入されているとも考えられる。①の場合にはNegPは存在せず、否定の意味は専ら否定副詞*not*に任されていたことになる。それぞれの派生の仕方は概略次のとおりである。

(9) [cp C [tp T [+F] [vp not [vp they v [vp wanst [cp what folke



they were]]]]]]

(10) [cp C [tp T [+F] [NegP [Neg not] [vp they v [vp wanst [cp what



folke they were]]]]]]

いずれの場合も定形動詞はvを経由してTに至り、そこで強い素性[+F]を照合する。(10)においてNegのもつ強い素性[+Neg]はすでに*not*によって照合されており、定形動詞*wanst*はNegを経由することはない。どちらの方式を採用するかは、(1)(c)と(1)(e)の混成形と考えられる(1)(d)の派生に密接に関係している。(1)(d)の形式は荒木・宇賀治(1984)によれば1500年～1700年という限られた時期に用いられた特殊な形式とされており、(1)(c)から(1)(e)へと変化する橋渡し的性格を持っていると考えられている。

- (11) I not doubt He came alive to land. (Shakespeare: *The Tempest*, II.i. 121)

上記の(9)と(10)のように否定辞*not*をvPに付加するにせよ、Negに付加するにせよ、いずれにしても動詞はvPから外へは出でていなことは明らかである。すなわち、いわゆるV-to-I移動(V-to-I Movement)行なわれなくなっている。この点に関して、前述の繩田（1998）において提案されている次の二点が重要である。

- (12) V-to-I移動の消失は強い素性[+F]がTからvへシフトしたことに起因する

- (13) ある主要部X<sup>0</sup>のもつ素性Fが別の主要部Y<sup>0</sup>へシフトできるのはX<sup>0</sup>とY<sup>0</sup>との間に主要部Z<sup>0</sup>が存在しない場合に限られる

この二点を考慮に入れると、TPとvPの間にNegPが存在する構造では強い素性[+F]がTからvへシフトすることが阻止されることになり（すなわち、上記の(10)の構造と同じになり）、動詞が*not*に先行する形式(8)があるいは後で述べることになる助動詞*do*を用いた形式が派生されることになる。従って、(11)においてはNegPは存在せず、否定辞*not*はvPに付加されていると考えなければならない。派生は概略次のようにになるであろう。

- (14) [CP C [TP T [vP not [TP I v [+F] [vP doubt [CP he came alive



to land]]]]]]]

動詞は強い素性[+F]照合するためにvへ付加し、主語Iは（恐らく）EPP素性を照合するためにTP指定辞の位置へ移動する。

(14)において否定辞*not*がvPに付加されているということは、すなわち、*not*は副詞でありまだ機能範疇に変化していない、ということを意味している。従って、(11)の前の段階に相当する(8)の段階においても同様のことが当てはまるはずであるので、(8)のもつ構造としては(9)が選ばれることになる。

次の段階は現代英語に見られる迂言的な*do*を用いた否定構文(1)(e)である。この形式においては次の二つの事態が生じていると考えられる：①強い素性

[+F]は (NegPをもたない) 平叙文においては軽動詞 *v* にシフトしている、② 否定辞 *not* は機能範疇に変化している。②によって否定辞 *not* を用いた文否定には NegP が存在することになり、従って①に述べた [+F] のシフトは NegP によって阻止され、 [+F] は T にとどまったままということになる。迂言的な *do* の扱いに関しては、前述の繩田 (1998) において提案されている考え方へ従う。そこで迂言的な *do* に関して述べられているのは次の二点である。

- (15) 迂言的な *do* は、他の虚辞と同じく、機能的な主要部の照合領域に直接挿入されて、何らかの強い素性 (この場合は [+F]) を照合する
- (16) 不可視統語論 (covert syntax) において、迂言的な *do* は完全解釈 (full interpretation) の原理を満たすために、意味内容をもつ原形不定詞に置き換えられる

以上の点を考慮に入れてると、次の(17)の構造は概略(18)のようになろう。

- (17) John did not eat anything yesterday.

(18) [cp C [tp [t did] [NegP [Neg not] [vp John v [vp eat  
↑  
[-----]]]]]]

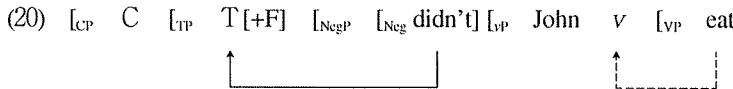
anything yesterday]]]]]

この構造においては、 Neg のもつ強い素性 [+Neg] を照合するために機能範疇の *not* が挿入され、 T に残留した強い素性 [+F] を照合するために虚辞の *did* が挿入されている。主語はこれまでと同じく TP 指定辞の位置へ移動し、動詞 *eat* は軽動詞 *v* に付加される<sup>3</sup>。そして、(16) に従って不可視統語論においては *did* が *eat* に置き換えられる。

(1)(f) の派生は (1)(e) とほぼ同じと考えてよいが、否定辞の扱いについて若干違いが出てくる。*not* と異なり否定接語 *n't* は (Akahane (1998) の指摘に従って) 単独では統語構造に導入されることはなく、必ず助動詞要素に付加した状態で導入される、と考えることにする。これは、前述の否定接語 *ne* の場合と同様の扱いである。従って、次の(19)の構造は概略(20)のようになろう。

- (19) John didn't eat anything yesterday.

否定命令文の変遷について—素性照合の観点から（1）—



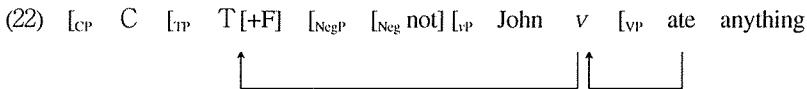
anything yesterday]]]]]

主語と主動詞の扱いについては(18)の場合と同じである。強い素性[+Neg]を照合するために、否定接語 $n't$ を付加された虚辞 $didn't$ がNegに直接挿入され、次に同じく強い素性[+F]を照合するために $didn't$ はTに付加される。この場合虚辞 $do$ は直接挿入ではなくNegからの移動によって強い素性[+F]を照合している。従って厳密な意味では(15)を満たしていないことになる。しかし、次の(21)のように移動によって虚辞が素性照合をする場合が他にも見られるし、また、 $didn't$ のような否定接語 $n't$ を付加された虚辞は導入される位置がNegの位置に限定されると考えられるので、この場合のような $didn't$ の移動による照合も含むように(15)を修正してよいと考えられる。

(21) there seems [t, to be [someone in the room]] [Chomsky (1995)]

(15') 迂言的な $do$ は、他の虚辞と同じく、機能的な主要部の照合領域に直接挿入されるあるいは、移動されて何らかの強い素性（この場合は[+F]）を照合する。

以上のように考えてくると、(17)と(18)に関して問題が起こってくる。すなわち、次の(22)に示すように、定形動詞を繰り上げる派生がなぜ許容されないのか、という問題である。



yesterday]]]]]

もし例句の中に虚辞 $did$ が含まれていれば、直接挿入の方が移動よりもコストがかかるという観点から、 $did$ がTに直接挿入される派生が優先される。そうなると、不可視統語論で $did$ に置き替わるべき原形不定詞が存在しないので(16)に違反することになり、解釈不能となって正しく排除される。

しかし、虚辞*did*が列挙の中にはない場合はどうであろうか。どうしても定形動詞が強い素性[+F]に誘引される派生を考えなければならず、不適切な文が生成されることになる。この問題を解決する方法としては、たとえば、NegPが一種の遮蔽幕のように作用するために、強い素性[+F]からは定形動詞が見えないようになり結果的に強い素性[+F]は定形動詞を誘引できない、と考えることができるかもしれない。その場合には、(5)と(7)を説明するためにNegPの主要部Negの位置は例外的に遮蔽されないと考えねばならない。あるいは別の方法として、虚辞*did*は列挙を経由せず辞書部門から直接的に統語構造に挿入される、と規定することも考えられよう。そうすれば、(22)においてはTの位置に*did*が挿入されることになり、上で述べたように正しく排除されることになろう<sup>4</sup>。文法としては後者の考え方のほうがコストがかからないと考えられる。

次回の第三節では、以上のような否定文の変遷の記述をもとにして、否定命令文の変遷を記述する。

(次回に続く)

### 注

\* 本稿は加藤（1996）を素性照合の観点から修正・加筆したものである。

\*\*参考文献は最終回に一括して掲載する。

1. *ne*がもつ接語としての性質により形態部門で「*ne*+定形動詞」に修正される、という「奥の手」を考えることも可能である。
2. 存在構文においてEPP素性を照合するために虚辞の*there*がTPの指定辞位置に挿入されるのとちょうど同じ操作である。ただし、この場合*not*は明らかに虚辞ではないのでこの操作が許容されるかどうかは検討の余地がある。また、機能範疇に変化したのは文否定に用いられる*not*だけで、いわゆる語否定の場合は除外されると考えることにする。
3. この軽動詞への付加は、動詞が主語にθ役割を与える能力を獲得するために必要

## 否定命令文の変遷について—素性照合の観点から（1）—

な操作であって、特に何かの素性を照合するためではない、という点が問題である。

4. 虚辞*do*を辞書部門から直接的に統語構造に導入すると考えると、次のような不適切な文が生成されるのではないか、という懸念が生まれるかもしれない。

(i) John did eat an apple yesterday.

しかし、虚辞*do*の使用がV-to-I移動の消失、すなわち強い素性[+F]のTから vへのシフトと連動していると考えれば、虚辞*do*がTに直接挿入される可能性はなくなり、(i)は生成されることになる。

